

### 3. 1か月の児を持つ母親のタッチケア 施行後の育児感情の変化

草川 功, 平田 倫生

(聖路加国際病院小児科)

井村 真澄, 金子 美紀, 秋屋 伸子, 井上 玲子, 佐藤由美子  
的場 晴美, 伊藤 敦子, 池下 貴子, 鈴木智恵子

(同 産科新生児病棟)

山崎三奈子, 竹村みち代, 土屋 正子, 吉川久美子

(同 公衆小児科)

#### 1. はじめに

授乳, だっこ, オムツ替え, 沐浴など育児の基本には“赤ちゃんに触れる”ことが必要不可欠である。しかし, 児に対しての不安感, 恐怖心などから, この“触れる”ことさえ自然にできない母親が増えてきている。こんな状況から, 我々は, 育児に取り組む母親と児とのよりよい関係を作り上げるため, 又, 児に対する, 愛着, 優しさの表現の一つである“触れる事”を自然にできるようにするために, “タッチケア”が大きな役割を果たすことができるのではないかと考えている。

今回, 出産を無事に終え育児のスタート台に立った母親に対して“赤ちゃんに触れる”ための方法論の一つとして“タッチケア”の指導を行い, 入院中と1か月健診時における母親の育児に対する不安, 及び, 心理状態の変化を調査し, タッチケア指導の有効性を検討した。

#### 2. 対象, 方法

対象は聖路加国際病院にて2000年6月から8月の3か月間に産出した母親275名の内, 正期産で母児に問題がなく且つ今回の調査に対して承諾の得られた192名で, 産後の入院中と, 児の1か月健診時の2回のアンケート調査, 及び, 心理テスト(日本版ポムス)を行い, この期間の母親の意識変化を検討した。又, 対象期間を

前半, 後半の二つのグループに分け, 一方には, タッチケアの指導を行い, 何も行わなかった他のグループとの比較を行った。尚, タッチケアの指導は, 育児の中でのタッチケアとしての位置付けを明確にするため, 自作ビデオを中心に産後2~3日目に行った。

#### 3. 結 果

2回の調査を不備無くフォローし得た母親は179名で母親平均年齢は $31.1 \pm 4.6$ 歳であった。この内, 初産は133名(母親年齢: $30.6 \pm 4.2$ 歳), 経産は46名(母親年齢: $32.7 \pm 5.5$ 歳)で, タッチケアの指導無しのグループが83名, タッチケアの指導有りのグループが96名となった。又, 1か月健診時の平均日齢は $35.2 \pm 2.9$ 日であった。

図1に, 産後入院中の母親の育児に対する不安感について示す。まだ実際にほとんど行ったことのない時期での調査であるが, 不安無くできそうと答えている人は, 全体では, 授乳(34%), おむつ替え(39%), 沐浴(39%), だっこ(59%)等に対して, タッチ(74%)と赤ちゃんに触ることに対する不安感は少ないことがわかる。図2は, これを初産, 経産の母親でわけた結果である。経産の場合, ほとんどの人(80%以上)が授乳以外の事に関しては不安無く行えると答えており, 初産と大きく異なっている。一方, 初産の場合は, 授乳, おむつ替え,

沐浴に対しては、4分の3以上の方が不安感を持っているのに対し、タッチに関しては、約3分の2の人が、不安無く行えると考えていることがわかる。図3には、1か月間の母親の意識変化を示す。すべてにおいて、1か月時には、不安感が減っているが、授乳に関しては、未だ半分以上の人が不安感をもっており、90%以上の方が不安なく行えると答えているタッチとは対照的である。タッチケアの指導の有無による比較が図4である。これは、母親に赤ちゃんに触れるときの意識を聞いたものだが、指導有りのグループの方が、87.8% (79.7%に対して) とタッチに対して積極性がある傾向がみられた。図5は、ボムスによる母親の心理状態の解析である。母親の主観による不安感が1か月時にすべての項目で減っていたのに対し、客観的なテストにおいては、①緊張、不安②抑鬱③怒り、敵意④活気⑤疲労⑥混乱のすべてにおいて、1か月時の方が不安定であり、これは、初産、経産において、その程度の差はあるものの、同じ傾向であった。

#### 4. 考 察

タッチケアが紹介されてから、徐々に多くの人たちが関わるようになってきたが、その中で『触り方がわからない』『この触り方でいいのか』など、方法のみが話題となり、本来の児とのふれあいという点から離れてしまっているケース

も散見される。そこで、我々は“赤ちゃんに触れる”ための方法論の一つとしての“タッチケア”指導という立場をとっている。これは、図6に示すような、育児に対するサポートがあってはじめて成り立つ事であり、その中の一つがタッチケアなのである。今回の、研究では、『触れる』という事が母親にとって抵抗なく不安なく行える行為である事が明確になり、育児指導の導入としてのタッチケアが理にかなっている事が再認識された。

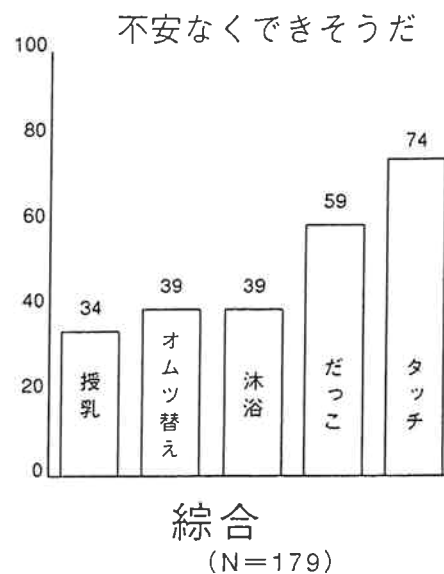


図1 育児のスタートをきったばかりの母親の意識 (入院中)

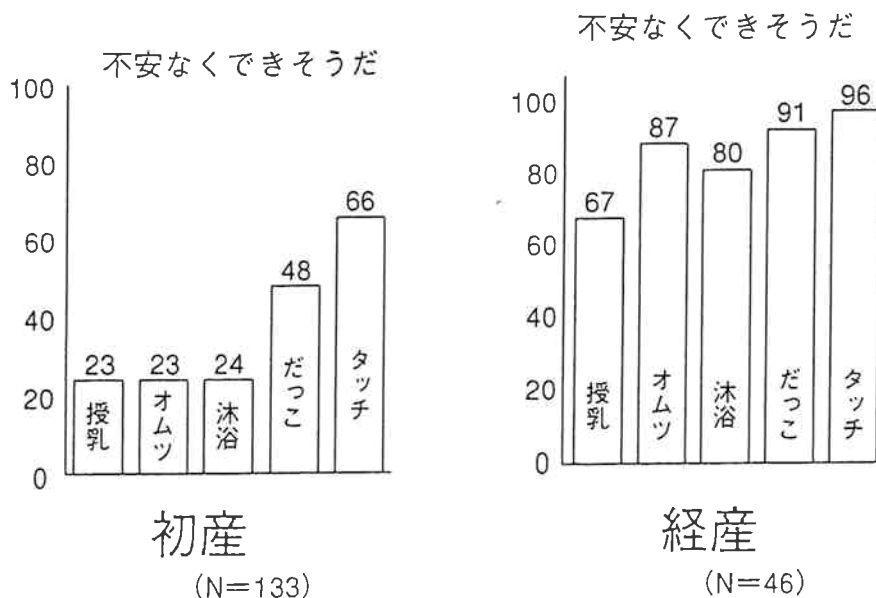


図2 育児のスタートをきったばかりの母親の意識 (入院中)

### 不安なくできそう

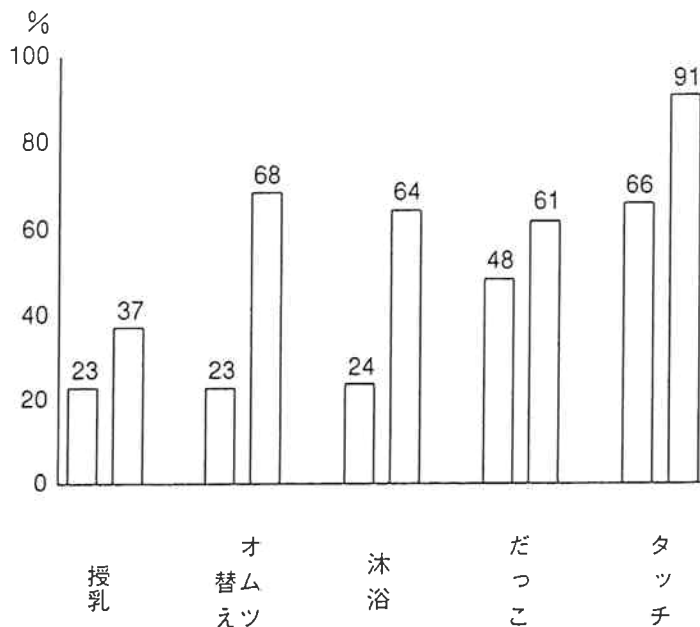


図3 初産の母親の1か月間の意識変化 (N=133)

### 赤ちゃんをどう触った？

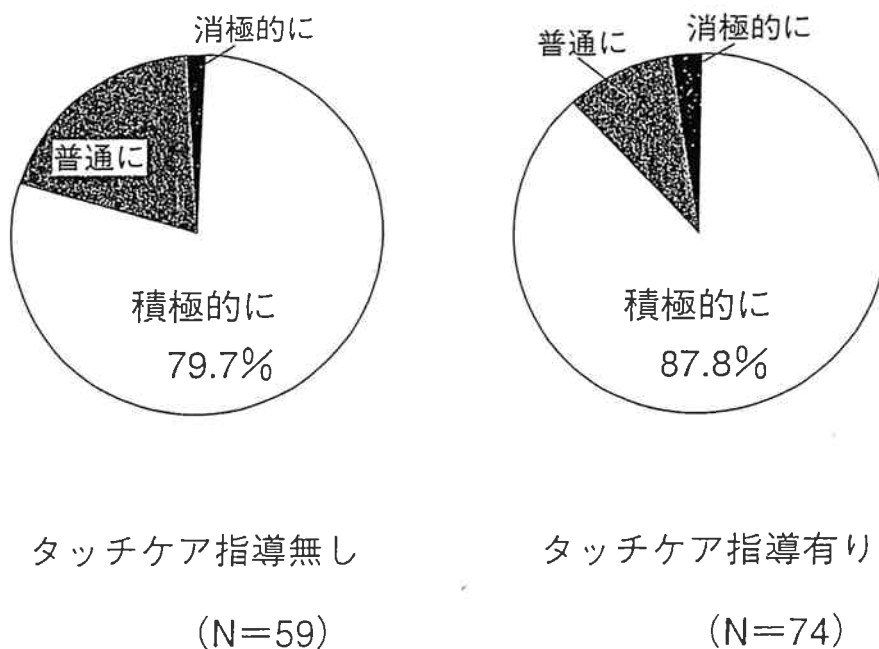


図4 出産後1か月たった母親の意識変化

出産後間もない時期と、1か月健診時の変化を見ると、母親の主観的な不安感は、かなり減ってきており、中でも『タッチ』に関してはほとんどの人が不安感なく行えると答えている事は我々を勇気づける結果であった。又、入院中から、タッチケアをその方法だけでなく精神的意

味合いを中心に指導する事は、『触り方がうまくいかない』などの過った道へ母親を迷い込ませることなく、単に、『触れる』ことに対する積極性を導く有効な手段と考えられた。

一方、ポムスによる心理テストでは、1か月時の方が、すべての項目でより不安定になって

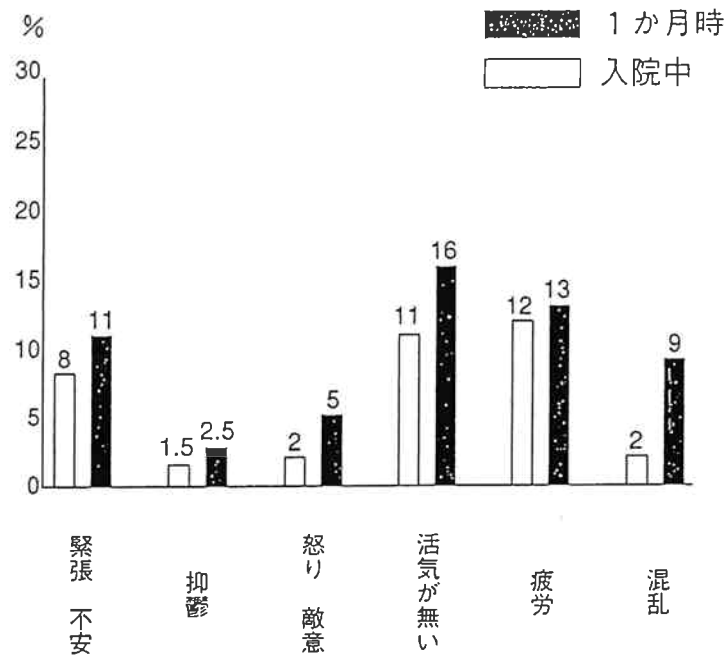


図5 1か月間における心理状態の変化 (N=179)

いる事が分かり、この時期の母親が、非常に微妙な不安定な状態におかれている事がわかる。主観的には不安は減っているものの客観的、潜在的にはまだまだ、不安定な時期なのである。育児指導、育児支援に関するものは、この不安定な時期を理解してその業務にあたる事が大切である。

今回のこの研究をとおして、『触れる』とい

う行為が、児に対して自然に行なわれるべき行為である事が再認識でき、タッチケアの育児の中での位置付けがはっきりした。タッチケアは児の体に触れる事ではなく、児の心に触れる事なのである。

尚、この研究の一部はジョンソン&ジョンソン株式会社のファンドにて行われました。

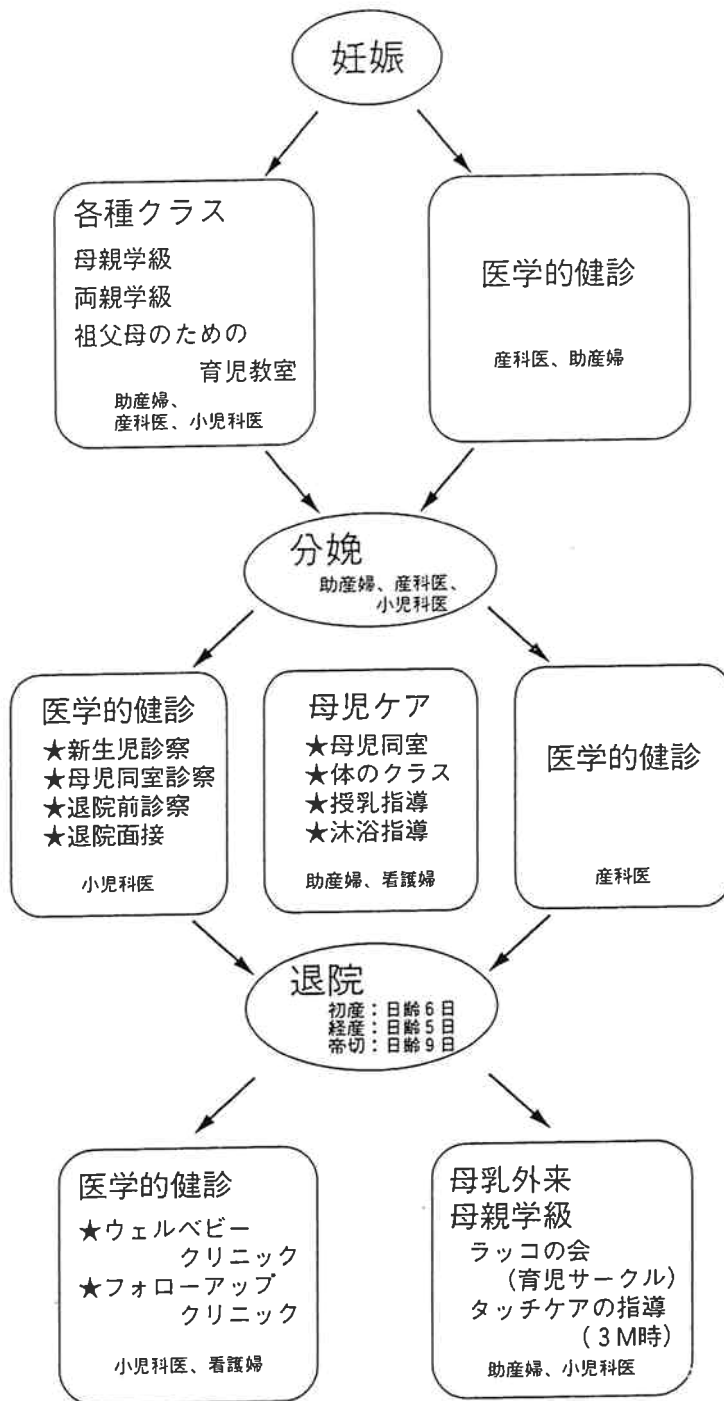


図6 母子ケアの流れ